

一八八四年十月十八日(土)

ドッキネシヨル
南神村において——カーリー供養祭の真夜中、
よろこび
歡喜の祭に——入三昧の
聖ラーマクリシユナ

聖ラーマクリシユナ、信者と共に真夜中のカーリー供養祭

〔校長、バブラーム、ゴパール、ハリパダ、ニランジャンの親戚、ラームラル、ハズラー〕

今日はカーリー供養祭である。キリスト暦一八八四年十月十八日、土曜日。夜の十時か十一時頃からカーリー大実母の供養がはじまることになっている。数人の信者がこの神聖な新月の夜に、タクル、聖ラーマクリシユナにお会いしようという急いでやってきた。

校長は夜八時頃一人で来た。境内に入ってみると、カーリー寺院における大祭はもう始まっていた。境内のところどころに灯明がつけられ、諸堂は明るく照らされていた。音楽塔からは、縦笛などの楽器の演奏による音律が流れてくる。寺院の職員たちは急ぎ足であちこち行ったり来たりしている。今日、このラースマニのカーリー寺院で、大きな催しがあると南神村の住人たちは聞いていた。夜には屋外劇がかかるということも——。だから村からは、子供、老人、女たちが数えきれぬほど参拝にき

ている。

午後にはチャンディー(聖典『デーヴィー・マハートミヤ』)の詠唱があつた——ラージナラヤンの出演である。タクルルは信者たちと共に、愛の喜びに浸りながらお聞きになつた。今日はまた後で、宇宙の大実母のお祭があるのだ。タクルルは嬉しくてどうしようもない様子である。

校長が夜八時頃いつもの部屋に入つて行くと、タクルルは小寝台の上にお坐りになり、向かい合つて床の上に数人の信者が坐つていた——バブラーム、若い方のゴパール、ハリバダ、キシヨリー、ニランジャンの親戚の青年が一人、それからエンレダから来た少年が一人。ラームラルとハズラーはとさどき入つてきたり、また出ていったりしている。

ニランジャンの親戚筋の青年は、タクルルの正面で瞑想している——タクルルが彼に瞑想するようにとおっしゃつたのだ。

校長はあいさつブラナムをしてから座についた。間もなく、ニランジャンの親戚はお別れのあいさつをして帰ろうとする。エンレダの少年もあいさつをして立ち上がった——いっしょに帰るつもりなのだろう。

聖ラーマクリシュナ「(ニランジャンの親戚に向かつて) お前、こんど、いつ来るつもりだい?」

青年「はい、月曜日に——と、思っております」

聖ラーマクリシュナ「(熱心に) ランタンがいるよ。持つて行くだろう?」

青年「いえ、この境内を出てすぐのところですから、必要ございません」

聖ラーマクリシュナ「(エンレダの少年に) お前も帰るのかい?」

少年「はい、ちょっと風邪気味ですし——」

聖ラーマクリシユナ「そうかい。なら、頭に布をかぶっていくといいよ」

二人の青年はもう一度あいさつをして、帰って行った。

ドツキネーシヨル
南神寺のカーリー供養祭大夜において聖ラーマクリシユナ、信者と共に讚神歌を楽しむ

厳肅な新月の夜。その上、宇宙の大実母を祀る日。聖ラーマクリシユナは小寝台の上で枕によりかかっっておられる。しかし、心を静かに内奥おくに向けておられ、時たま信者たちと一言二言ことばを交わされるだけである。

突然、校長や信者たちの方を見ておっしゃった——「アハー、あの青年の瞑想はよかった！（ハリパダに向かつて）——え、どう思う？　ほんとにいい瞑想だったね！」

ハリパダ「はい、おっしゃる通りでございました。全く、丸太ン棒のようでした」

聖ラーマクリシユナ「（キシヨリーに向かつて）あの青年を知ってるかい？　ニランジヤンの従兄弟いとこか何かにあたるんだよ」

再び一同は沈黙した。ハリパダはタクールのお足をさすっている。

タクールは午後、チャンデーの詠唱をお聞きになった。その中の一節をお口へのほせて、静かにゆっくり歌っっておられる——

カーリーの性さがと相すがたを知るは誰ぞ

六派の哲学 はるかに及ばず――

ヨーギーはムーラダーラとサハスラーラで

絶ゆることなく、その心像すがたを想い描く

カーリーは蓮の花むらに

配偶つれあひと睦むつみあう白鳥のごとし

カーリーは歓喜に満ちあふれし真我アトマン

至聖の音 オームなり

あらゆる存在存在の中にいて

自分の好きなように住んでいる

その子宮に全宇宙はらを孕はらむ

大いなるもの性と相すがた

その秘密を知るは、マハーカーラ(シヴァ)のみ

他には誰一人、知るものはない

ブラサードは言う　カーリーを知ろうなんて
大海を泳いで渡るようなものだ

ブラサード——ベンガルの詩人、ラームブラ
サード

魂は知るとも　心ではわからない
月を捕えようとして手を伸ばす小児のごとし

タクールは起き上がってお坐りになった。今日はマーのお祭——マーの名をお称えになるのだろ
う！

再び、情熱をこめて歌われた——

これは皆、狂おしき女神の遊戯あそび

その創造現象マールヤに三界は我を忘れる

その妖女はかくれたところで勝手気ままに遊び

自分も狂い　夫も狂い　二人の弟子も狂う

色すがたも形さがも性さがも、身振り手振りも

考えていることも何一つ説明できぬ

毒をのんでやけつく喉の痛みにもめげず

夫のシヴァ大神はその妻の名を繰り返し呼ぶ

有と無を対立抗争させ

土塊をもって土塊を壊し砕く

妖女は何事にも易々と承知するが

自分の仕事に関しては決してゆずらない

ブラサードは言う

「この生命の大海に

いかだを浮かべてそこに住もう

満ち潮のときは押し上がり

退き潮のときは引き退ろう」と

タクールは歌いながら法悦に酔ってしまわれた。そして、「これはみんな、神の愛に酔ってしまつたときの歌だよ」とおっしゃって、また、次々とお歌いになった――

一 こんどはカーリー、お前を食べよう

1884年10月18日(土)

食べても大実母^マを胃袋^いには入れない
胸の蓮座にちゃんと坐らせて
大事に大事に祀^{まつ}ってあげよう

一八八四年九月二十八日に全訳あり

二
だから、大実母^カ、お前に聞^きこう

三
至福の大実母カーリーは

マハーカーラ(シヴァ)の魅惑者

あんたは自ら踊り歌い

自ら手を拍^うち喜び給^{たま}う

本源にして永遠なるもの

空^{そら}の姿に月の輝きをのせ

大宇宙のまだ出来ぬときに

頭蓋骨の首飾りをどこでつけたか

すべては道具で あんたが使い手

私たちはあんたの支配で動く
留まれといえばここに居り
大実母の言わせるままに言う

心乱れたカマラーカーンタはイライラして
非難をこめて抗議した

カマラーカーンタ——十八世紀の西ベンガルの詩人

「マーよ、こんどはすべてを破壊者として来て
正と不正の二つとも食い尽くしてくれ」と

四

ジャイ・カーリー、ジャイ・カーリー(カーリー女神に勝利あれ)と言って
最期の息がひけるなら

必ずシヴァの浄土にゆける
バナラシ詣でなど用はない

色も形も無限のカーリー

その足の長さを誰が見る？

偉大な魂はほんの一部を眺め

シヴァさえ足もとに倒れ伏す

歌は終わった。ちょうどその時、ラージナラヤンの息子二人が入ってきて、あいさつをした。午後、舞堂でラージナラヤンがチャンデーの吟誦ぎんじょうをした際、この二人の息子もいっしょに歌っていた。タクルは、二人の少年と声を合わせてまたお歌いになった——これは皆、狂おしき女神の遊戯あそび……弟の方がタクルに申し上げた——「あの歌をうたっていただけませんか——こよなく慈悲深い御方……」

タクルは、「ガウルとニタイ、君たち二人の兄弟は、かい？」とおっしゃって、その歌をうたわれた——

ガウルとニタイ、君たち二人の兄弟は

こよなく慈悲深いお人と聞く、おおまよ

一八八三年十二月十四日に全訳あり

歌い終わると、ラームラルが部屋に入ってきた。

聖ラームクリシュナ「何か一つ歌え。今日はお祭だ」

ラームラルは歌った——

戦いの場を照らす あの女は誰だ!?

黒い雨雲のようなからだ――

齒の間からは電光がひらめく

波打つ髪を後にたなびかせ

神々と悪魔の戦場を怖れもせず

すさまじい笑いをあげて鬼どもを殺し

眼をくらます閃光で戦いの形相を暴露す

紅蓮咲く彼女の身に滴る

精励のしづくの美しさ

彼女の美の海を見て

月も輝きを失う

宇宙を魅了するシヴァが

死骸のように足下に声もなく

カマラーカーンタよ、さあ知れ

この大象のように歩く女の正体を

次の歌

戦場に来ているこの美しい女は誰？

雨雲のように濃い肌色をした

血の池に浮かぶ青蓮華のような――

タクールは、喜びに我慢ができなくなったご様子で踊りはじめられた。踊りながら、またお歌いになる――

わが心、黒蜂のごとく

シャーマの御足の青き蓮華に魅せられたり

一八八三年三月十一日に全訳あり

歌と踊りは終わった。信者たちは再びみな床に坐り、タクールも小寝台にお坐りになった。

校長に向かつておっしゃった――「お前、来ていなかったけど、午ひるすぎにあつたチャンデーの歌がとてもよかつたんだよ」

カーリーブージャ供養祭の夜、三昧に入る――信者を思う天啓のような言葉

信者たちの誰彼は、カーリー寺の神々に参詣するため出かけて行つた。ある者は、参詣がすんでから一人でガンジス河畔のガートガートの石段に坐つて、静かに称名している。夜も十一時になった。深夜で

ある。上げ潮なので流れは北に向かっている。川沿いのランプの火が、水のところどころに黒く映っている。

ラームラルが礼拝式次を書いた本を手にして、カーリー堂にやってきた。その本をお堂の中に置いておくのだろう。モニが信愛にあふれた目で大実母を見つめているのを見て、ラームラルは、「よかつたら、内陣にお入りになりませんか?」と言った。モニはありがたさに感激しながら内陣に入った。見ると、大実母は大そう美しく飾られている。内陣は、マーの正面のランプが二つと、上からのシャンドリアであかあかと照らされている。床にはお供えを山盛りにした皿がおいてある。マーの足もとには、ジヨバ(ハイビスカス)とビルヴァの花。そして、様々の花でつくられた花輪がマーの身辺を飾っている。モニは正面にある羽扇(私子)に目をやった。突然、彼は思い出した。タクールが、この羽扇を手を持って、どれだけマーを扇いでさしあげたことか! それで、彼は遠慮がちにラームラルにきいた。「この羽扇を、いちど手に持ってみてもよろしいでしょうか?」ラームラルは許可を与えてくれた。彼はそれを手に持ってマーを扇いだ。まだそのときは礼拝式が始まっていなかったのである。

やがて、外に出ていた信者たちは、みな再びタクルの部屋に集まってきた。

ベニー・バル氏から招待状がきていた。明日、シンティのブラフマ協会の集会に来て下さるようにと、タクールを招待しているのである。招待状は日付が間違えてあった。

聖ラーマクリシュナ(校長に) ベニー・バルが招待状をよこしたんだ。でも、どうしてこんなふうに書いたんだろうねえ?」

校長「おっしゃる通りです、日付が正しくありません。注意して書かなかつたのでしよう」

部屋の中にタクールは立つておられ、バブラームがすぐ傍に立つていた。タクールはベニー・パルの手紙のことを話しておられ、バブラームの体には手をかけながら立つていらつしやつたのだが——突然、そのまま三昧に入られた！

信者一同はタクールをとりまいて立つていた。この入三昧の靈的偉人を、驚いた様子で拝見している。タクールの三昧境——左足を前に出して立つていらつしやる。首が少し前の方に傾いている。バブラームの首の後、耳のあたりに手をおいていらつしやる。

しばらくして三昧は解けた。まだお立ちになつたまままだ。こんどは手を頬ほおにあてて何か考えているようなご様子で立つておられる。

ニコツと笑つて、こんどは信者たちに向き直り、話しかけられた。

聖ラーマクリシュナ「みんな、見たよ——誰がどの位、進歩したかをね。ラカール、この人(校長を指す)、スレンドラ、バブラーム、大勢の人を見たよ！」

ハズラー「わたくしは？」

聖ラーマクリシュナ「ウン」

ハズラー「まだまだですか？」

聖ラーマクリシュナ「いや——」

ハズラー「ナレンドラのことは、ご覧になつたのですか？」

聖ラーマクリシュナ「見なかったけれど、今、少し苦勞をしているということはたしかだ。でもね、みんなが成功するのを見たんだよ。

(校長の方を見つめて)——まだ潜^{かぐ}れていることを、みんな見たよ！」

信者たちは感激して、天啓のようなこの言葉を驚いた様子で聞きいつていた。

聖ラーマクリシュナ「でも、これ(バブラーム)に触^ふっていて、あんなふうになった！」

ハズラー「ファースト(二番)は誰ですか？」

タクルルは黙っておられたが、しばらく経^かつてからこうおっしゃった——「いったい何人、ニティヤゴパールのような状態になれるだろうね？」

そしてまた、考えこんでいらつしやる。まだ前と同じ格好で立つておられる。

再び話される——「アダル・セン——もつと世間の用事を減らせば——。でも心配だ！ イギリス人にまた叱^{なぐ}られるかも知れんから——。お前、何やってるんだ！」と言^いつてさ」(一同少し笑う)

タクルルはいつもの場所に行つてお坐りになった。信者たちは床に坐つた。バブラームとキシヨリーが急いで小寝台の方^{かた}にかけより、タクルルの足元に坐つて、それぞれタクルルの足をさすっている。

聖ラーマクリシュナ「キシヨリーの方^{かた}を向いて」今日はえらくサービスしてくれるんだね！」

ラームラルが入^いつてきて額^{かぶ}ずいてタクルルを拝^かし、信愛^{バクタイ}をこめた様子で御足の塵^{ちり}をいただいた。これから大実母^{ママ}のお祀^{まつり}りを勤^まめに行くのである。

ラームラル「(タクルルに)では私は、あちらに行つてまいります」

聖ラーマクリシユナ「オーム・カーリー、オーム・カーリー。よく気をつけてお祈りをするんだよ。それに、生贄いけにえの山羊ヤマギのこともあるしね」

深夜——。供養祭プーシヤは始まった。タクールは祭を見にいらっしやる。大実母マのそばに行つて拝礼なさつた。こんどは生贄を捧げる順番だ。人々は一列に並んで立っている。犠牲になる山羊の準備を整えてから台の方に引っぱつていった。そこでタクールは、お堂を出てご自分の部屋にお戻りになった。

タクールは犠牲式を見物するような境涯ではいらっしやらない。獣けものが殺されるのを見ることはお出来にならないのだ。

夜中の二時頃まで、何人かの信者は大実母マカーリーのお堂に残っていた。ハリバダがカーリー堂に入つてきて、「おいで下さい。タクールが呼びびです。食べものの用意が出来ますから——」と言つた。信者は供物のお下がり(ブラサード)をいただき、食べた場所に横になつて少し眠つた。

夜が明けた。大実母マへの早朝マシガラの献灯アキラテが行われた。大実母のお堂の正面ナトマンデイルに舞堂がある。そこで芝居が催されている。大実母が芝居をご覧になるのだ。タクールもカーリー堂の煉瓦敷の中庭を通つて芝居を見にいらっしやる。モニも従ついて行く——おいとまをして帰るつもりなのである。

聖ラーマクリシユナ「なぜ、今ごろ帰るんだい?」

モニ「今日、あなた様は午後からシンティになりますね。私もそこへ行きたいと思ひますので、一度、家に帰ります」

話をしながら、大実母マカーリーのお堂のすぐそばまで来た。すぐ近くの舞堂では芝居が始まつてい

る。モニは石段の下に平伏して、タクールのお足に額ぬかずいてお別れのあいさつをした。
タクールはおっしゃった。——「そうかい、またおいで！ それから沐浴のとき使う布きれを二枚、わたしに持ってきておくれよ」